

的だった。食堂へは店員の他にも、いろいろな人が来る。奥さんと幼い女の子と三人連れで食事をする異色の人が散髪屋の「大橋さん」。店の頭株以下殆んどが、大橋理髪店の職員で仕事の合間にちよつとした息抜き役を兼ねる理髪室は調法な存在でもあった。月末になるとツケの散髪代を集金に来てくれる。あるとき「金子さんや日野さんや横山さんの頭は量が少ないから安いのと違うか……」と誰かが言ったら「めっそうな。あのお方等のおつむは一本一本見落しのないように刈らんらんから却って手間がかかる。三倍もろうても引合わん」と言つて大笑いした。

月給日の午後は若い仲間に生氣が甦える。食意地の張つた「げすい」連中は、申し合せたように海草亭や日の出食堂や宝亭へ足が向く。元町一丁目の穴門を上がると忘れてはならないのが「順生院」だ。本店の指定医として入店当初の身体検査から病氣投薬の一切について多かれ少なかれ世話ならぬ者はない。「院長の渡辺さん」「副院長でチヨビ髭の大森さん」は本店の身内同様なじみが深い。

大森さんはその頃まだ数少ない洋楽のレコードの収集家で、ビクターやコロムビアの十二インチ盤の名曲をよく聞きかせてくれた。音楽の稀少価値の高い頃で、中山手の青年会館ではレコード・コンサートと称して入場料を取られたような嘘のような話のあつた時代である。聚楽館でロシアのグランドオペラの公演があつたとき、仲々手に入り難かつた入場券を一枚、大森さんが譲つてくれたが、目の玉が飛び出るような大金は痛かつた。大森さんが小首を傾げるような病患になると診断書と一緒に北野の病室へ送り込まれる。加納町の三角市場から山手へ少し上がる北野天神の斜め下手の辺に静かな小じんまりした二階建ての病室があつた。鈴木商店北野病室と書いた看板が掛つて寝台が一階と下とで十二、三あつたように記憶する。「小堀さん」という看護婦のベテランが、二人の看護婦を使つて入室者の看護と管理に当たつていた。物柔い如何にも婦長にふさわしい清潔な感じの人で万刃なく患者に慕われていた。この人のご主人は「小堀洋服店主人」で、やはり本店の指定をとり見習員全員にお仕着せの詰襟の服を仕立ててくれた。

小堀さんの場合、夫妻別々の仕事で鈴木商店の傘下にあり、二人とも穏やかな物腰で鈴木の家風にとけ込んでいるように見えた。珍しい例である。「岡部印刷の御曹子五峰さん」は本店でこの人ほど顔の広い人は他にない。各部各室に繋りをもち、店内を颯爽と潤歩していたのは新入の私等は上司の人と間違えてよく頭を下げたものだ。白晦の面影は往時をそのままに現在、わが辰巳会会員として多大の貢献を頂いている。去る三十八年四月には紺綬褒章受賞の榮に輝き、円熟の境地に到達された人柄はイブシ銀のような重厚さを思わせる。「五仙堂印刷の番頭さん」あだ名は豆狸。店内を敏捷に飛び回つていた角帯前垂れの和服姿が目につかぶ。「清水洗濯店の女主人」は男勝りの活発な人で、若い者を連れては本店の注文を集めていた。寮の蒲団のカバー等も小母さんの手で定期的に取り替えては清潔にしてくれた。

忘れるともなく消え去らんとする懐しの群像よ！鈴木商店解散四十周年の歳に、本店の裏方さんとも言うべきこれ等の人々の面影を思い浮べると、あながち感傷とのみ片づけられるわけには行かない。既に他界せられた人もあろう。読む人の胸中に文中の一人でも記憶を呼び起こして頂ければ私の喜びは之に過ぎない。亡き人々へは追善のために、そして現存のわれわれには何がしかの糧のために。

併記 本年十月九日、東京辰巳会が中央区築地スエヒロにおいて盛大に開催された。筆者も幸便を得て上京、初めて列席するの機会を得たが、主宰側のご熱心と五十名に余る先輩諸卿の交情に接し、改めて本部のそれに些も遜色のない充実さから敬服申し上げた。その席上でのことである。幹事の鈴木丸衛氏が「たつみ誌第七号掲載の拙稿『東川崎町から海岸通十番へ』の中でポートレース応援の檄文『摩耶山麓風運動た急にして、敏馬海上殺気天に漲る：云々』とあるのは同氏の作であつて、五十年振りに旧知の脳裡から引き出されて日の目を見様とは。まるで失なつた物が帰つて来たような喜びをおぼえた」との言葉があつた。私は事の意外さと怪我の功名に感激、思わず同氏の手を握りしめたことであつた。埋木に花が咲いたよいうな故い思ひ出話が、今日に脈々と波打つて心の交流に音をたてようと、げに昔の夢は美しき哉。

ある日 金子武蔵

少し寒い、よく晴れた晩秋のある日の午後、波止場に近いホテルの部屋に着いた。珍しく今夜と明朝には用談があるからであるが、しかしここは、ありし日をしのぶのに都合がよいからでもある。

オヤジは英語をしゃべることが全くできないのに、よくこのホテルで外人を相手に商談したり、パーテイを開催したりした。むろん建て物は、その当時とはすっかり変わっており、同じであるのは名と場所だけであるが、しかし私にとっては、これだけでありし日々をしのぶ縁（よすが）として十分なのである。それに私の生まれた通りはここから二キロとは距だつていないし、オヤジが番頭をつとめていた商館も、私の少年時代には一キロばかりの所にあつた。午前にこの商館に来て、一階で飽きると二階に移り、これもイヤになると海の見える屋上へ昇つて悪戯をして、ボンサンたちを困らせた。

当時、ペン先はまだ貴重なものであつたが、ある方の机上には小さな紙

の箱に、それがドッサリ入れてあつた。珍しくてたまらないので、それをいじくり回したが、この方は後年さる商社の会長になつた俊英の士で、先輩の子といえども仕事の邪魔になるなら容赦はしないという氣迫の持ち主であつたので、ひどく私を叱つた。しかし少年は格別それも気にとめず、一日中遊びほうけていた。夜、どうして須磨の家に戻つたか、一度も覚えていない。多分、オヤジの荷物になつただけのことである。

汽笛にうながされて窓に目をやると、建て物の間に海が見える。私はもうたまらなくなつて、激しい自動車の波を辛うじて避けつつ波止場までたどり着いた。西のほうには鉄拐の峰が夕陽に輝やく須磨浦につき出ているが、かつて私はあの山ふところに住んでいたので、懐しい山の姿は込み入るように私の目に映じた。今日はあすを訪れる暇もない。あすに今も佗住居をしている者たちの行末幸あれかしと祈るのみであつた。

夕食にはまだ時間があるので元町へ行くことにした。少年の頃、花火を買つた南京街も今はもう無いようだが、昔とはすっかり変わつていながらも港の、街らしいエキゾチックな雰囲気は漂つており、それに電車も自動車も通らないので、ブラブラ歩きにはもつてこいでである。しかし灯がつくと、街は私にはいつの間にか昔のままの元町になつてしまつた。学期休みごとに母に連れられて西の端から東の端まで買い物をして歩いた。小学校生のとき元町の横丁にはいつかオヤジのかかりつけであつたKという洋服屋さんに連れて行かれて寸法をとられたことがある。何か祝いごとがあつて洋服を新調したのであろう。ただそのとき連れて行つてくれたのが母であつたか、親切なジイヤンであつたかは思い出せない。

ロンドンとかハンプブルグとかいうようなヨーロッパの有名な港の多くは河港である（海から遠く距たつたパリでさえ、もとは港町である）。海から上ぼつてくる。また奥地から下だつてくる大小新旧数々の船、その上に立つ油で汚れた、また鄙（ひな）びた船員の姿、河にかけられた橋などが港町独特の雰囲気をかもし出している。しかし神戸には航行できる河はないから、港といつても海港である。よく神戸はゼノアに比せられるが、今はオヤジも眠つていられる山ふところの墓地から眺めても、風光の絶佳の讃えられるのは故なしとしない。オヤジの親友のお宅が山手にあつたが、日々この海を見て暮らすのは清福というものである。それに気候は温暖で、木立ちも関東に比べなんとなく優雅である。海港としての神戸の優秀性はけだし世界有数のものであろう。

神戸のエキゾチックな華やかさは海港たることに基づいていられる。第一次世界大戦後のパリ講和会議のときにも特命全權大使の西園寺さんには、お花さんにかしずかれて神戸から出帆したが、そのようなときに五彩のテープ乱れ飛ぶ波止場の情景は、海港神戸を象徴するものであつた。しかし今は旅行の見地からすると、河港も海港も次第に空港に席を譲りつつあり、オヤジが貿易商であつた頃の神戸の華やかさも遠のきつつある。しかし、それだけに神戸の誘う情趣は、私にとっては、ありし日々の追憶と調べを同じうしている。（東大名教授）